

中村 裕 先生を悼む

赤 津 隆

中村 裕先生は7月23日午前7時30分、肝硬変のため大分の自宅において急逝された。

57歳というあまりにも早い死であった。23日朝訃報をうけた時、一瞬わが耳をうたがった。御遺族のこと、大分中村病院のこと、そして多数の身障者の自立の場である太陽の家の将来のことなど次々と頭にうかび、しばらくは呆然として立ちすくんでしまった。つい2カ月前には電話で色々話をしたばかりであったのに、あの声が最後となってしまった。何となく何時もの声とちがって弱々しく感じた事が思い出される。

そういえば6月の札幌の日整会でも、7月松山のリハビリ学会でも、姿をみる事ができなかった。先生に代って座長をつとめた副院長の畑田先生におききすると、毎日病院には出ているが、旅行は用心しているとの事で危機感を感じられず、安心しきっていたやさきの事であった。

同じ天児名誉教授門下として、整形外科のリハビリテーション、就中脊髄損傷のリハビリテーションを終生の仕事として選んだ同志の一人である私にとって、かけがえのない人材を失った悲しみは筆舌につくしがたいものがある。あまりにも早すぎた。

先生は英国留学で体得した故グットマン卿の理念を我が国で完全に開花し実現することに成功した開拓者であった。しかもつねに我々より一步も二歩も先を歩き、さらに幅広い活躍をしてきた。その先見の明と行動力は凡人の私にとっては驚異的にも思え、不思議な才能と魅力をもっていた。勤務医では身体障害者の自立達成には限界のあることを知り、公職をなげうち、一市井の医師として開業、一方では身障者の自立の場としての太陽の家を創設した。新しく自分で病院を運営することでさえ大変なことであるのに、太陽の家を創立して身障者に働く職場を提供することに情熱をかけたのである。その御苦労は創設期から行動を共にした多くの従業員がみな知っている。従業員食堂には旧海軍の錨のマークのついた古い食器を展示している。初心忘るべからずの精神はすべての従業員に徹底している。

もはや太陽の家は障害者自立の場としては我が国のみでなく、世界中がモデルとして注目している。「世に身心

障害者はあっても、仕事に障害はあり得ない。太陽の家に働く者は被護者ではなく労働者であり、後援者は投資者である。」この信念がオムロン、ソニー、ホンダ、三菱商事など多くの後援者を得て、蒲郡に、さらに将来は京都にと将来の構想は大きく止る所を知らなかったのである。

また我が国の身障者スポーツの振興についても大きな貢献を果し、昭和38年の山口国体、昭和39年東京パラリンピックと次々と成功に導き、さらに昭和50年にはフェスピックとアジアにおける主導権をとり、国際車椅子マラソン大会まで成功させてしまった。毎年のストックマンデビル大会には常に出席、東奔西走その活動は国際的であり、永年国際パラプレジア医学会の理事をつとめた。何時だったか私に「疲れましたね」と珍らしく弱音をはき、私を驚ろかせたことがある。こんなことを口にする人ではなかった。

また恩師天児名誉教授が発起された日本パラプレジア医学会の創立に奔走し、自らは昭和54年第14回日本パラプレジア医学会会長を務めた。まさに八面六臂の活躍であった。

7月28日の告別式には、皇室からお言葉を賜わり、政財界から多くの弔辞がよせられ、正五位勲三等に叙せられた。参列者約2000人の中には多数の車椅子、松葉杖の人々が、身障者の父と呼び、その死を心から悼んだのである。

短い人生があまりにも多忙で、あまりにも苦労が多い一生であったと思う。しかしすぐれた先見の明と、なみはづれたバイタリティーと、身障者にかかる情熱と信念が、他の人にはできないことをなしとげたのである。

永年の腹心であり片腕であった畑田和男先生が、先生の後継者となった。将来のことは全く後顧の憂いはないであろう。

先生は最後まで障害者、障害者と口走っていたという。障害者の自立のために一生を捧げた先生らしい大往生であった。

(総合せき損センター院長・第19回
日本パラプレジア医学会会長)